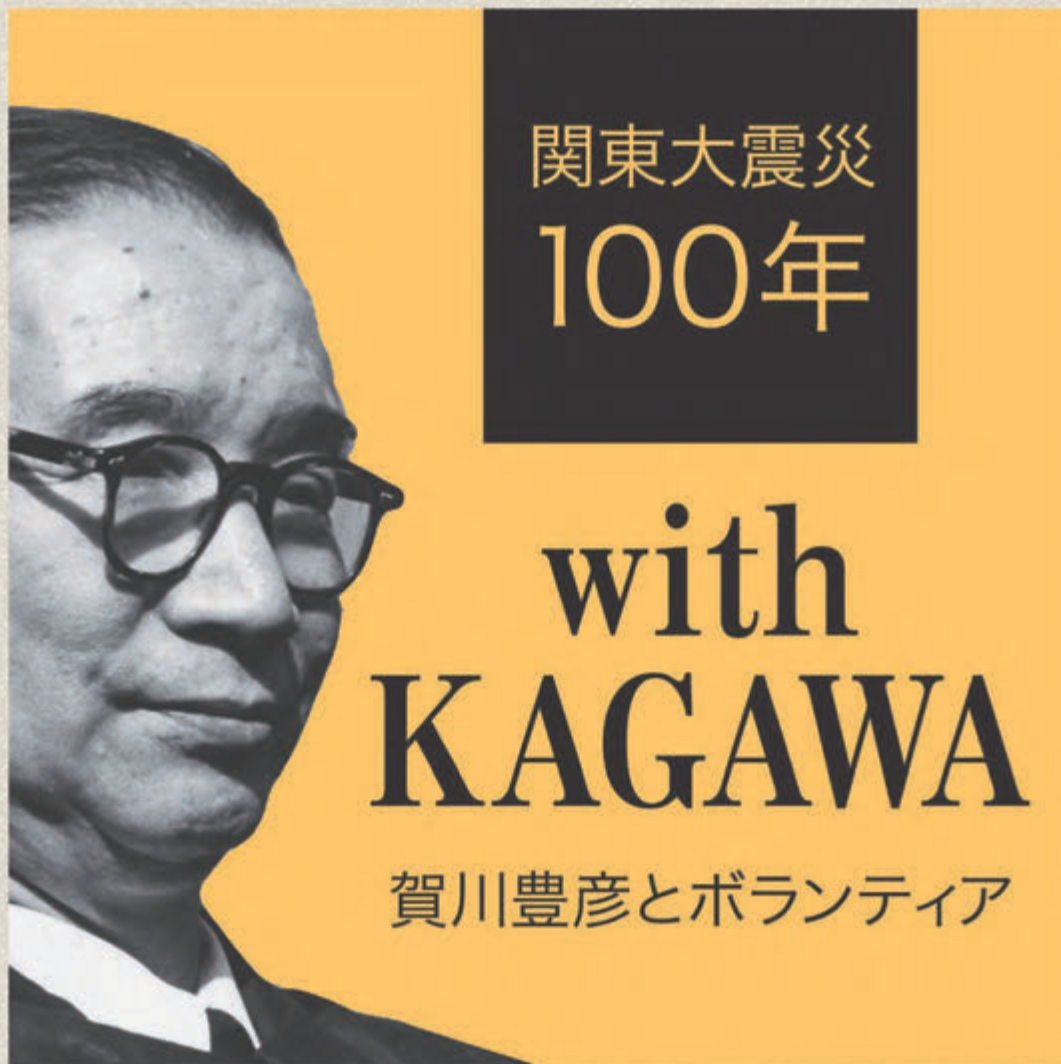


関東大震災 100 年事業
賀川豊彦とボランティア 関連企画



関東大震災
100年

with
KAGAWA

賀川豊彦とボランティア

特別展

賀川豊彦と関東大震災

—震災ボランティアの先駆者—

共催 日本基督教団銀座教会 賀川豊彦記念松沢資料館
「関東大震災 100 年事業 賀川豊彦とボランティア」実行委員会

ごあいさつ

社会運動家の賀川豊彦(1888—1960)は、明治、大正、昭和の時代にたすけあいを提唱し実践しました。神戸での貧困救済活動から始まり、やがて人々が安心して暮らしてゆけるための労働組合、協同組合、共済事業などの推進を行ってきました。現在では「協同組合の父」とも呼ばれています。

1923(大正12)年9月1日に関東大震災が発生すると、賀川はすぐに東京へ駆け付け、現地を視察の後、同年10月からは墨田区本所で、天幕及びバラックに住みながら、被災者への支援活動を始め、地域の復興に貢献しました。その際、復興支援に活躍する奉仕者を「ボランチャー」(義勇兵)と呼び始めました。

今年2023年は関東大震災から100年を迎えるにあたり、かつて賀川豊彦とその仲間たちが携わった「震災ボランティア」と、そこから発展した各種社会事業を振り返り、今日の社会における「たすけあい」についてを考える機会とするため、多くの団体が結集して「関東大震災100年事業 賀川豊彦とボランティア」と題した実行委員会を結成しました。本パネル展は、その事業企画の一環として開催致しました。

本展を通じて賀川の足跡をたどりつつ、共に生きる社会を考察する契機として頂ければ幸いに存じます。

関係者一同



関東大震災で焼けた東京 YMCA

1923(大正12)年9月1日、神奈川県相模湾北西沖80キロを震源として発生したマグニチュード7.9の海溝型の大地震が発生した。東京、神奈川、千葉、静岡などの南関東地方の広い範囲に甚大に被害をもたらせ、死者行方不明者が10万5千人、全壊した住宅が11万、半壊10万、消失した家屋が21万に上ると記録されている。近代化を迎えた日本が直面した、未曾有の災害に日本中が震撼した。

この知らせは、ようやく翌日になってから、関西で活躍していた賀川豊彦の耳にも入った。その日は日曜日で、礼拝の終わるやいなや神戸のキリスト教関係者へすぐさま連絡をはかり、協議の後自らも被災地へと向けて出発した。午後6時出発の山城丸に乗り、翌3日に横浜に到着、4日に上陸を果たし、徒歩と一部汽車を使って品川まで行き、その日は友人中山昌樹の家に泊まった。翌5日には東京の災害救援事務所を訪れ、そこで救援物資の状況を聞き、米は十分あるが、資金と衣類などが必要との情報を仕入れた。



当時のスラムの風景

当時の賀川は、神戸のスラムにおいて救貧活動を行っていた。

1909(明治42)年12月24日、21歳の賀川豊彦は単身で貧民街に移り住み、救貧活動を始めた。しかしこの地域の状態は悲惨であった。衛生状態は最悪であり、伝染病が流行していた。近代化と共に、港湾地区の都市下層労働者がこのスラムに流れ込み、2、3畳敷きの長屋に家族が5～9人住む過密状態であった。また風紀、秩序は乱れ、金品の盗難は茶飯事、なかでも「もらい子殺し」という悪慣習が横行し、金目的に子どもを預かるが、面倒を見ないで餓死させることが平然と行われていた。賀川が刊行した詩集『涙の二等分』は、「もらい子」の犠牲となった“おいし”という赤子を題材にした作品である。賀川は、病者の介護、こどもの保育、教育、食料の配給、無料診療所、職業斡旋などの各種の救貧活動を通して地域改善を行った。やがて留学から帰国してからは、労働運動、協同組合事業へと活動を発展させていった。救貧活動から防貧事業へと軸足を移していったのである。



賀川は、9月6日朝、品川から汽車と徒歩で横浜へ戻り、材木船東華丸に乗せてもらって清水港までゆき、そこから汽車で神戸へ帰った。戻って二日間、賀川は眠れなかったという。戻るまでは必死であって、とても感情の浮かぶ間もなかったが、帰宅して安堵を覚えると、東京と横浜とを歩いたことがまるで夢心地に感じ、同時に現実の厳しさを覚えた。親しい友の死、また数十万人の人々の死と、壊滅的な東京の有様に、心中が騒いでじっとしていられなくなった。そのとき賀川は「東京横浜が癒されるまで私は半狂乱である」との激しい感情を抱いた。被災地の視察を終え、仲間たちと善後策の打ち合わせを果たした賀川は、このこみ上げる複雑な心理を、次の救援活動へと結びつけていったのである。



被災地にて
賀川豊彦（中央）
末広巖太郎（左）
石田友治（右）

神戸を発って東京へ到着した賀川は、神田美土代町の東京YMCAを訪れ、焼け残った石段の前で、大声で賛美歌を歌っていた盟友石田友治と再会した。そしてその瓦礫の中でともに座して「東京を再興したまえ」と祈った。それはただの空しい神頼みの言葉ではなかった。灰燼の中で賀川と石田や仲間たちは現状の情報交換をし、眼前の救済についての打ち合わせをし、実行に移す前に神に期待をこめた祈りであった。その後、彼らは上野へと足を向けた。上野公園で始まっていた、ミルク配給所の様子を見るためであった。数人の奉仕する青年らが新しい荷車にコンデンスミルクとバケツを載せて引いていく姿を見て、賀川は喜んだ。そして小高い丘から帝都東京を見渡し、そのあまりの惨状に茫然自失となった。まだ火はくすぶり続けており、その焼け野原を前にして立ち尽くすしかなかった。

石田友治は1923（大正12）年3月に東京YMCA講堂で賀川が提唱した「復活共済組合」に賛同して以来、1942（昭和17）年に彼が召天するまで約20年間、盟友として賀川と活動を共にした。彼は医療組合設立など数々の活動を行った。



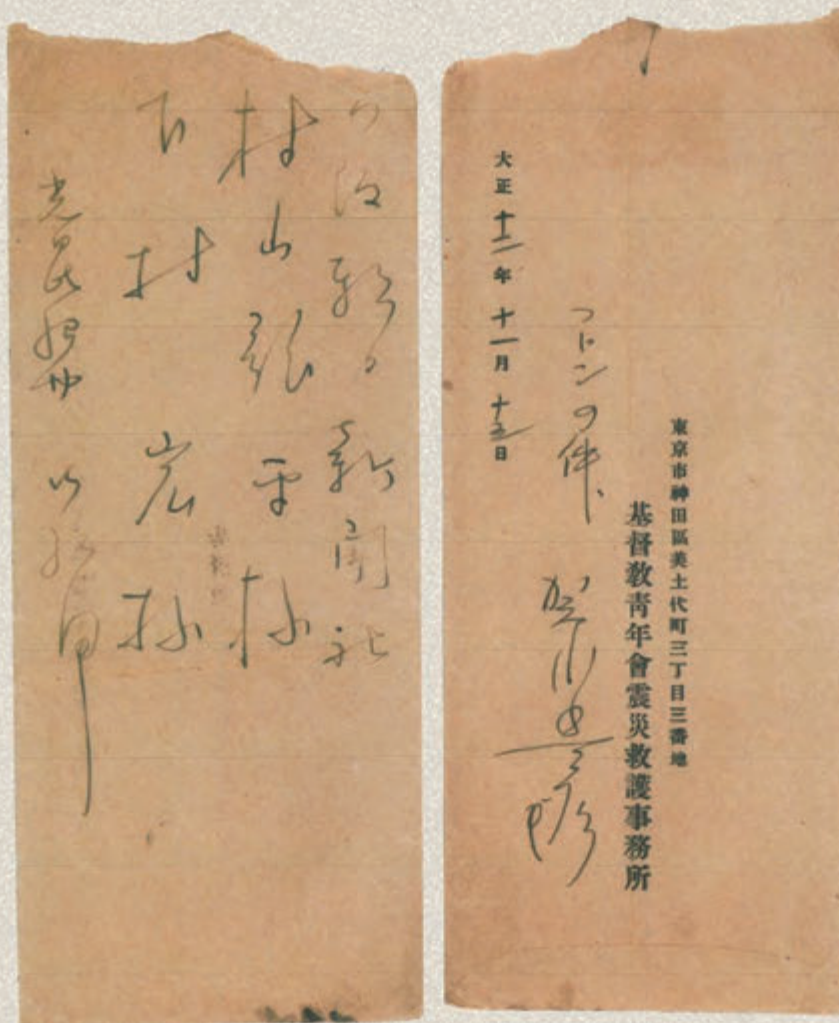
天幕（テント）での保育活動

10月8日には上京して内務省と東京市を訪れた。そこで冬に向かって衣類、布団の不足という情報を入手した。また賀川は、救済事業の現状を調査しようと思い立ち、調べた結果、公的機関では布団の準備が十分用意されていないことを実地調査で確認に至った。そこで「防寒運動」を願った賀川は、10月13日に再び神戸へ引き返し、さらに16日には長崎丸で東京へ再出発し17日には布団、下駄などの窮乏する品々を横浜に水揚げした。そして10月19日、本所で「婦人矯風会外人部」が運営していた「興望館」跡地にテントを張って、そこを拠点にして救援活動を開始した。現在の墨田区本所である。

彼は著書『地球を墳墓として』の中で述べている。

「～私が本所でしたい仕事は、要するに神戸の仕事をそのままここへ持ってくることであった...」

神戸での防貧事業を東京でも行うことを語っていた。救貧活動の経験を生かした、被災地救援を展開していくのであった。



大阪朝日新聞へ送った賀川の書簡 「フトンの件」と記している

被災直後の東京で、すぐに賀川が現地での救援活動をしなかったのには理由があった。それは、YMCAの石田友治との打ち合わせで、東京のキリスト教関係者には、救援金がないことを知らされた。そこで賀川は、義捐金を集めるために神戸へ引き返して、40回にもおよぶ講演活動を行って、入場料と寄付金とを集めて、東京へ送金した。そのために彼は、関西のみならず四国九州まで駆け巡ったのであった。

また当時の新聞には、賀川が大阪梅田の駅前で演説して、集まった群衆へ蒲団の寄付を呼び掛ける記事が載っていた。その時集められた蒲団は、本所地域の被災者たちへ配られた。

賀川の言葉 ①

関東大震災
100年

with  KAGAWA

「組織する仕事私たちの仕事」



大正13年 本所松倉町で始めた診療スタッフ



関東大震災救援に
集まった人々

賀川の言葉

「...私たちが少しでも塵ほどでも罹災者の苦しみを我らの背に負わせてもらうことが出来るなら、それほどうれしいことはないのである。それで、罹災者たちが、自ら自己の互助の力で立ちえるようにお助けすることが出来るなら、それも結構である。すなわち、組織する仕事私たちの仕事である。窮している人々の現状に触れてから何かからお助けしてよいかを観ると共に、お金を出さなくとも、困窮している人々の自力でそれを突破し得る方法を考えて差し上げるのである...」

『地球を墳墓として』より

賀川の言葉 ②

良き隣人として寄り添う



賀川の言葉

「...一度に幾十万人の貧民を作った今日、隣人としての私たちは防貧に救貧にお助けしなければならないのである。殊に、お金でお助けすることができるものと、金でお助けのできないものがあるから、私たちのように金のないものは、善き隣人としてお近づきになるより仕方がない。私の第一にしたい仕事は、セツルメントである。この冬を通じて罹災者の困苦を自ら体験し、バラックの苦悩を自らも一緒に味わい、それを科学的に調査して世間に訴えることである。つまり私は「眼」になりたいということであった...」

『地球を墳墓として』

賀川の言葉 ③

「セツラーとして、テントや、バラックに住んでみなければわからない」



賀川の言葉

「...統計報告には「心」が書いてない。救貧運動の根本は心である。物質の欠乏により起こる心理反応である。悩みである。もだえである。そうした罹災者の悲しみを統計で現すことはできない。それはどうしてもセツラーとして、テントや、バラックに住んでみなければわからない...」

『地球を墳墓として』



本所産業青年会で働いたスタッフとボランティアたち

賀川の活動は、この後各種の事業へと発展を遂げてゆく。
彼はセツルメント活動を各種、実際に始めることで、地域の回復とまちづくりを始めていった。そのために賀川は、人的な組織化をはかり、各種事業をも組織して運営に乗り出すのであった。

- レスキュー rescue (救助)
- リリーフ relief (救援活動)
- リハビリ rehabilitation (心のケア)
- リコンストラクション
reconstruction (再建)
(阿部志郎氏)

10月30日に神田のYMCAで「震災救護運動」を打ち切り、「復興運動」に入る会合がもたれた。その日から、物質的、精神的、両面における「東京の復興」のためのボランティアが始められたと、本所基督教産業青年会の一人、深田種継が遺している。

賀川たちの活動は上記のように、今日の言葉でいうと、レスキュー、リリーフ、リハビリ、リコンストラクションという継続的なプロセスを続けることで、地域と個人の回復への助力を進めた。

本所基督教産業青年会

関東大震災
100年

with  KAGAWA



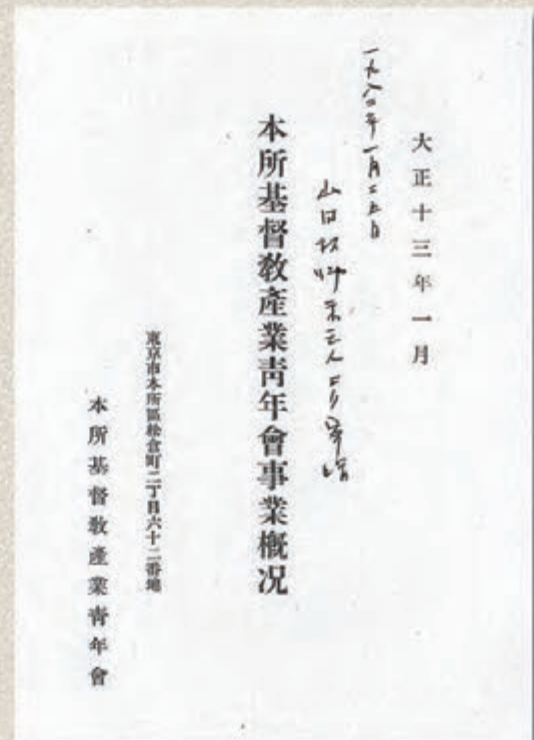
本所基督教産業青年会 (IYMCA)

やがて賀川とその仲間、自力で困窮状況を突破する力を、人々が備えてゆけるようにお助けすることが必要だとして、本所基督教産業青年会（以下産業青年会と表記）を10月19日に立ち上げた（公式には12月14日）。賀川が構想したセツルメント運動が、本格的に立ち上げられたのである。



大正13年
本所基督教産業
青年会のスタッフ

本所基督教産業青年会 事業概況



本所基督教産業青年会事業概況(大正13年1月) (名誉主事 賀川豊彦)

- 1 宗教部 (伝道、講義、天幕児童保育)
- 2 教育部
(編物・裁縫・刺繍講習、英学院、図書室、文化講演)
- 3 調査部 (人口調査)
- 4 社会事業部
(職業紹介、無料人事法律相談、バラック経営、
救済部 — 衣類、毛布、布団の提供)
- 5 無料診療所・児童健康相談所 (診療、巡回看護婦)
- 6 牛乳配給所 (市社会局の委託による牛乳配給事業)
- 7 児童栄養食給与 (市社会局の委託による栄養食配給)
- 8 体育部 (児童の遊戯、体操の指導)
- 9 低利事業資金貸金 (信用組合)
- 10 組合事業部 (労働、消費)
- 11 その他の事業 (無料宿泊所、巡回看護婦養成)

バラックの完成

関東大震災
100年

with  KAGAWA



本所基督教産業青年会が建てたバラック(大正13年)

1923(大正12)年11月には、罹災者収容事業としてバラックが建てられ、一時的な居住地の運営が始められた。賀川たちは、10月19日からテント住まいで活動をしていたのだが、わずか10日ほどでこの簡易な家屋が完成したのである。同月末には、4棟のバラックが完成して、託児所、診療所、罹災家族の収容施設、職員宿舎として稼働した。隣保事業の拠点がここに固まった。青年たちは、冬に備えてフトンの配給体制を整えていった。活動する青年たちは、平均して25名、多い時は50名以上が参加し震災ボランティアを行っていた。賀川豊彦もバラック内の6畳一間に住み活動をしていたが、翌年3月に腎炎等を発症し、やがて静養のために松沢村(現在の世田谷区上北沢)へと移り住むことになった。松沢村への手引きは、当時徳富蘆花の書生をしていた、三井常太郎という村役場に努める人物が行った。武蔵野の自然豊かな土地で賀川は癒され、また本所イエス団の日曜学校を松沢村で開催するなど、都市部と郊外との地域交流を重ねていくこととなってゆく。

本所イエス団 (のちの東駒形教会)

関東大震災
100年

with  KAGAWA



本所イエス団日曜学校

1923(大正12)年10月21日(日)産業青年会宗教部集会在、日曜学校を開催した。それ以後、路傍説教を続け、翌年1924(大正13)年5月からは名称を「本所イエス団」とした。本所基督教産業青年会の精神的な支柱であった。

1927(昭和2)年に独立した教会となり、教会条例を作成した。役員は、理事長に賀川豊彦、牧師に大井蝶五郎、執事は木立義道らであった。

しかし、1941(昭和16)年に戦時体制から宗教団体法が施行され、日本基督教団が成立しその第一部へ加入し、名称を「東駒形教会」と改称し今日に至る。



産業青年会は、1924(大正13)年1月安田庭園内に天幕を張って託児事業を始めた。「光の園」と賀川豊彦が命名した臨時の保育施設であった。隣接する旧陸軍被服廠跡地は、避難者が火炎旋風に巻き込まれて犠牲となった場所であり、未だうずたかく白骨が積まれていた有様であった。保育には、三人の産業青年会「義勇奉仕者」の女性が担当した。北井すまゑ、渡辺照子、赤松常子であった。赤松は後に労働運動で活躍し戦後には参議院議員となっている。翌大正14年にはバラックが同地に建ち、児童50名を収容した。しかし間もなく、同庭園は東京市の施設として整備されることとなり、要請に従ってすべての設備を市へ移譲した。その後、松倉町の産業青年会の建物が完成し、区画整理の関係で近隣の保育施設「興望館」が移転することから、新たな保育施設の設立を望む声が地域から上がった。そこで、協同組合としての「光の園保育組合」が設立された。やがて「光の園保育学校」と改称された。給食を提供し始め、後にこの試みが、江東消費組合の栄養食配給事業のへと発展していくこととなった。また本所イエス団の日曜学校と共同で林間・臨海保育を試みており、特色ある保育活動を行っていた。

黎明寮と向日寮の設置

関東大震災
100年

with  KAGAWA



左：本所基督教産業青年会
右：黎明寮（後に東京家政学校校舎）

産業青年会は、住宅を焼失した被災者のため、主に地域の労働者のための宿泊施設を設置した。そこは単なる宿泊所にとどまらず、肉体的にも精神的にも休養を得られ、さらに人格育成を目的とした家庭的な寄宿舎として設置された。資金は東京府の震災義捐金が供与され、府の委託事業という形で始められた。建物は震災の翌年1924(大正13)年12月に竣工した。

黎明寮は定員40名で松倉町の産業青年会の隣に、向日寮は定員30名で石原町1丁目に建てられた。それぞれに主事と寮母をおき、各室には勉強向けの机椅子まで備えられた。経営は苦勞続きであったが、八年間で延利用人員15万人の宿泊を供した。その後1932(昭和7)年に閉鎖され、黎明寮は東京家政学校の校舎に、向日寮は愛の園保育園へと転用された。

江東消費組合の設立

関東大震災
100年

with  KAGAWA



1927(昭和2)年4月、産業青年会のバラックの一角で、労働組合と隣保事業関係者とによって、購買組合が事業を開始した。認可を受けたのは1928(昭和3)年6月であった。設立の動機は、産業青年会のセツルメント事業を協同組合の精神的、経済的基盤の上に基礎づけようと意図したことによる。

まずは日常の生活物資の取り扱いを行い、米、みそ、醤油、薪、炭などの共同購入を行った。当初は関係者の努力によって、配当が順調であった。しかし行政による復興計画によって、区画整理が行われ、組合員の居住地の異動が激しくなり、また不景気も重なり、さらに政府の緊縮財政によっても大打撃を受けた。

しかし難局を乗り切り、やがて近隣の家内工業者、小企業者向けに「栄養食配給事業」として弁当の配達を行い、発展期を迎えた。1日に二万食を供給するにまで至った。店舗も四店舗となりさらに組合員の温泉旅行を実施するなどリクリエーション活動も行った。

1945(昭和20)年3月の東京大空襲により江東地区は灰燼と化し、事業は停止を余儀なくされた。戦後は息を吹き返すも再建には至らず、昭和26年、解散に至った。



1924(大正13)年、本所地域の在住の労働婦人の教育の場として「裁縫夜学校」を設け、1928(昭和3)年に組織化して「本所裁縫女学校」と改称し昼間一ケ年修了にて授業を開始する。その後、1931(昭和6)年4月に「東京家政専修学校」と合併して以後はその名称を引き継ぐ。

「東京家政専修学校」は、当初は牛込弁天町にて開校されたが、昭和期になってから本所地域の事業へと移され、江東地区の子女教育と伝道を目的としていた。冒頭にある「本所裁縫女学校」と合併してからは、本所基督教産業青年会の隣保事業として運営されるようになる。

設立者 賀川豊彦 校長 小川信。

そのモットーは「助け合い運動の精神を広めること」「真実を育てる教育」などであった。1945(昭和20)年の東京大空襲で校舎が消失して廃校となった。

東京医療利用購買組合 中野組合病院

関東大震災
100年

with  KAGAWA



東京医療利用組合創立総会 立っているのは新渡戸稲造 向いは賀川豊彦

賀川は1923(大正12)年に、不時の災厄時に見舞金を贈呈する「東京復活共済組合」を創設した。この運動は産業組合による医療・保険運動に引き継がれた。そして、賀川は医療組合のモデル病院を建設し全国に普及させるため、新渡戸稲造と共に東京医療利用組合を創設し、医師会の猛反対を克服して、1932(昭和7)年新宿診療所を開設。翌年、中野において中野組合病院(現中野総合病院)を開院した。東京医療組合の創設メンバーは、秋田における組合病院設立への協力も行っていった。

「ボランティア」 (義勇兵)の呼称

松倉町の
バラック
より
トヨヒコ

バラックは室内九十五度で、午前十一時過ぎはもう仕事も何にも出来ませぬ。今年の夏の苦しきは誠に今から想像がつき

ます。本所のバラックの不良状態を研究しましたところが、五千〇二十一戸の直に改良を要すべき不良住宅が見付かりました。この状態では今年の夏の病死者は頗る多いことであらうと考へます。老人などで、あの焦げつく焼けトタンの下に住んで居る人々などは、病氣になれば、とても救はれないであらうと考へます。祈らざるを得ませぬ。

■あまり怠がしいので、近頃は讀書の時間も書く時もなく、弱つてゐます。

■此夏はまた大勢のボランティアが助けて下さるそうですから、調査に、救済に賑やかに働けることと今から楽しみにして居ります。私はもう八月のプログラムをきめられて、休みも無く馬車馬の如く一本軌道を走らさせられます。

■松倉町に居ると毎日数人の身上相談を受けます。それらの人々のお世話してゐるだ

『雲の柱』第三卷第六号 松倉町のバラックより 1924(大正13)年8月1日発行

賀川は震災の翌年には「ボランティア」という言葉を使い始めている。今日の「ボランティア」である。日本国内ではかなり早期の使用だと考えられているが、元来キリスト教の教会では、信徒が教会ために、伝道などの奉仕活動をするのが推奨されており、この概念そのものは教会内では、広く一般的であった。

しかしながら、賀川は被災地における復興活動において、この用語を拡大して使い始めた。それ故「震災」における復興活動を行う者を「ボランティア」として呼称したのは、賀川豊彦が初めてではないとも言われている。(諸説あり)

むすび

「たすけあいの輪を広げよう」

賀川豊彦は、一人ひとりの人間が持つ無限の可能性を重んじ、また人々が、組織的、社会的に連帯することで、相互に助け合い、支え合う道を唱えた。神戸の貧困問題という危機的状況からの解放を訴えた賀川は、震災の被害を受けた人々の住む地域へ、神戸で経験してきた組織的な活動を持ち込むことで復興へと導こうとした。

かつてスラムで経験したことは、貧しい人々への共感と人格交流を基として、そこに住む人々の潜在的な能力を引き出していくための「助力」を基本とすることであった。そしてその具体的な実践として、彼らと共に住みながら、地域の改良を目指す「セツルメント活動」を始めていった。やがてそれらは地域改善からさらに社会事業へと進み、労働運動や協同組合事業が発展していった。

関東大震災における全人的な解放を唱える賀川は、被災者救済を一時的な措置として考えてはいなかった。セツラーとして関わりつつも、人々が互いに癒し合い、共に街を再建するまで協働し合えるように助力し働きかけていった。賀川の考えは、人格同士が結びつき、相互に励まし支えあって社会を作り上げてゆこうとする姿勢である。

今我々は、気候変動によるかつてない自然災害の発生により、これまでにない危機的な状況に置かれていると言える。しかし、かつて賀川豊彦が活動したように、私たちも有事にそなえて、平時より連携し、有事の時にはそれまでのネットワーク力を駆使して、助け合いや支え合いをしていければと願ってやまない。本展は、まさにその実践を目指して結集した諸団体による、共同の企画である。どうか、助け合いのネットワークが今後も各地で進み、国内のみならず、国外においてもその働きが広がることを願ってやまない。共に生きる社会をめざし、そのために身近な人々との「むすび直し」を求めていくことを本展から受けとめて頂ければ幸いである。